

•チャイコフスキーの組曲——交響曲創作との関係

序

チャイコフスキーにとって、管弦楽曲は、オペラと同等か、それ以上に重要なものであり、チャイコフスキー自身も好んで作曲していた部類である。しかし、管弦楽曲というと、交響曲が際立って重要視されていて、組曲はその背後に隠れて、それほど単独で、チャイコフスキーの一つの側面として論じられることはない。確かに、交響曲、とりわけ第4番から第6番は、他の作品には見られないチャイコフスキーの独自性が顕著であり、一般的に評価されている、優れた作品である。けれども、チャイコフスキーの組曲第1番から第4番は、交響曲第4番と第5番が作曲した、1977年から1988年のあいだの11年に集中して書かれている、ということから考え合わせると、組曲はこの時期に、交響曲にかわる地位にある曲である。そして、交響曲に代わる多楽章の規模の大きい作品として、一時期の傾向を示している作品である。しかし、組曲は、前期3作の交響曲第1番から第3番と比較しても、演奏機会はたいへん少なく、一般的にあまり評価されている作品ではない。それは、組曲の前に書かれた交響曲第4番がチャイコフスキーの一つの頂点であると考えられるほどに、優れた作品であり、それに続くものとしては、あまりにも作曲者の独自性が見られないといったことからである。交響曲第4番から第5番のあいだの時期は、チャイコフスキーの創作意欲が減退した期間であるといわれている。そして、チャイコフスキーが、その創作力を維持するために何か書かなくてはいけないと思い、とりあえず作曲していた曲である、というように考えられることが多い。しかし、この時期に示した傾向がすべて組曲に反映されているのであり、いくらかの作風の変化を推測することができる。

交響曲第4番、第5番、第6番は、後期3作として、一連のものとして考えられているが、その間に組曲が作曲されたことによって、その後に書かれた作品への影響を明らかにし、組曲がこの時期に書かれた意義を考察する。